

入館者数が30万人に
到達しました！
ありがとうございました。

6月16日(土)の午前中に平成17年2月8日オープン以来の入館者が30万人に到達いたしました。30万人目になられたお客様には館長より花束、認定書、年間入館券、記念品などが贈呈されました。ますます皆様に愛される「文化のみち二葉館」であるよう、スタッフ一同いそいそがんばっております。これからも、どうぞよろしくお願いたします。



二葉館関連本紹介

『よみがえる力は、どこに』
城山三郎(1927~2007)

城山三郎の一面を知るまた貴重な本が出版されました。



2012年6月発行 新潮社

「これは城山氏が仕事場として使っていたマンションで遺族によって新たに発見されたものである。内容から見ると、城山氏の没後に発表された、妻・容子さんへの追想記『そうか、もう君はいないのか』(新潮文庫)の一部を成すはずであった草稿だと思われる。」(本文より抜粋)

特別イベント

「宮沢賢治：講演と読みがたりと胡弓の調べ」
講演 「雨ニモマケズ」に寄せて

宮沢賢治ってどんな人？

東海学園大学名誉教授 井上寿彦

宮沢賢治は二八九六(明治二十九)年八月、岩手県花巻に生まれました。この年の六月には、後に陸羽大地震とよばれる地震が起きています。大津波が発生して、岩手県だけでも死者二万二千以上という、昨年の東日本大震災の全死者・行方不明者数より多い大変な大惨事でした。

賢治が三十七歳の短い生涯をとじたのは、一九三三(昭和八年)九月ですが、この年の三月にも大地震・大津波が発生し、岩手県は最も大きな被害を受けました。

その後、少し内容をゆがめられながらも、戦前の教科書に載せられ、躍、賢治の代表作のように、見られるようになり、戦後、この作品を、明治以後の日本人の作った詩の中で最高の詩である、という人と、この作品は、賢治がふと書きおろした過失だとする人と、評価が真つ二つに分かれました。どちらが正しいのではなく、私たちは、

私たちの感性で読めば良いと思うのですが、この機会にそれも考えてみましょう。それからごく最近も話題になったことですが、「雨ニモマケズ」の本文はまちがっているというのです。たしかに賢治の書いた手帳を見ますと、一か所違っているのです。その手帳の複製のコピーをもとに、賢治が、言おうとしたことを考えて見たいと思います。



文化の
道遥 その七の

番外編

【永楽屋】
現在の名古屋市中区錦付近

書籍が知の中核を担っているのは今も昔も変わらない。とりわけ、この名古屋の出版事情を探ると、この地域における知の集積事情が見えてくる。名古屋を代表する進学校の一つ、県立明和高校。この学校の歴史は古く、八代藩主徳川宗勝の時代まで遡る。七代藩主宗春は名古屋が発展する上で大きな礎を残したが、赤字財政や負の遺産ともいえるべき幕府との対立関係も残した。財政再建と幕府との関係の融和を試みたのが宗勝であった。宗勝は学問を重視し、学問所を設立した。これが今の明和高校である。学問所は九代藩主宗睦のもと、藩政改革の一環として藩校、明倫堂となった。宗睦は改革を実施する際、藩士に対し教育を施す、精神的な基盤を作ることが必要であると考えた。その結果、書籍の受容が増大し、この地域に書籍の創業が相次ぐこととなった。名古屋を代表する書肆、永楽屋東四郎(東壁堂)も、この時期の創業である。1803年創刊の「尾藩書肆東壁堂版目録」を見ると、明倫堂で教鞭を振る藩士の著作が多く並ぶことに気付く。永楽屋の発展は、尾張の学問の発展

と密接に繋がっていたのだ。学問振興の時流に乗った永楽屋は、やがて江戸進出を果たした。この時、江戸でのパートナーとなったのが、葛屋重三郎であった。葛屋は江戸を代表する大書肆で、京伝の黄表紙、歌麿、写楽の浮世絵等の出版だけでなく、太田南畝、曲亭馬琴、十返舎一九らと親交をもち、名実共に江戸文化を支える存在であった。

その後、永楽屋は様々なジャンルの出版も請け負うようになる。葛飾北斎の「北斎漫画」はその典型とも言えるだろう。北斎は二度



DATA 永楽屋

- 名古屋城内3Fに永楽屋が復元されています。
- 名古屋城/名古屋市中区本丸1-1 052-231-1700
午前9時~午後4時30分 ※天守閣へのご入場は午後4時まで 一般500円、中学生以下無料

来名し、うち一回の滞在時には、西本願寺別院にて大達磨を描くという偉業を成し遂げた。北斎漫画版元の永楽屋はこのイベントをプロデュースし、本の宣伝に当たった。藩学としての知から活路を広げ、書籍を通じてこの地区の町人文化の総合知を飛躍的に発展させた永楽屋。その足跡は大きい。

東海中学校教諭 島田尚幸

参考文献
名古屋の出版 江戸時代の本屋さん 名古屋博物館/編 平成56年5月発行
尾張出版文化史 太田正弘/著 平成7年3月発行
日本書誌学大系82 尾張の書林と出版 岸雅裕/著 平成11年10月発行
新修名古屋市史 第四巻 新修名古屋市史編集委員会/編 平成13年3月発行

書庫 襟 かん

初夏の文学散歩
「坪内逍遙と、川上貞奴をめぐる旅」

二葉館の読書会 鈴木裕治

五月十三日。この日は、「二葉館の読書会」の特別企画で、文学散歩を行いました。名古屋・栄の蕉風発祥の地や、北区・久国寺の岡本太郎作の梵鐘など、知られざる名所を訪ね、岐阜県美濃加茂市では、「みのかも文化の森」や坪内逍遙ゆかりの地である旧中山道の太田宿を歩きました。



成田山貞照寺(岐阜県各務原市鷺沼)

好天に恵まれ、展望室から眺める御岳の雪や、木曾川の清流などは、どの地も景勝と呼ぶにふさわしいものでした。

昼食をとった「山水」の鰻は、とても風味豊かで、こんがり焼かれた皮とふんわりした身が食欲をそそり、箸が止まらなくなるほどの美味しさです。

最後に訪れた、川上貞奴により建立された成田山貞照寺は、不動明王像や諸芸上達を願う名だたる人々がこぞって参拝した跡や、貴重な宝物が所蔵されている縁起館など、院内の景色と相まって、美しい想いをとどめた、由緒ある場所でした。



美濃太田 虚空蔵堂ムクノキの前で